

2019 夏休みすいせん図書

～本の森へ～



西東京市図書館

1・2年生

「すごいね!みんなの通学路」^{つうがくろ} ローズマリー・マカーニー 文 西田佳子 訳/西村書店
学校は楽しいですか? せかいには、学校に行きたくてたまらないのに、行けない子どもがたくさんいます。また、学校へ行くことができても、川を歩いてわたったり、高
いがけをのぼったり、たいへんな通学路もあります。

この本は、世界中の子どもたちが通学する姿をとらえた写真絵本です。



「せんそうをはしりぬけた『かば』でんしゃ」 間瀬なおかた 作・絵/ひさかたチャイルド
1936年3月に生まれたでんききかんしゃ『イーエフ・ゴジウゴ・イチ (EF 551)』。かおがにているので、『かば』とよばれるようになりました。やがて、日本がせん
そうをはじめると『かば』もしゅうげきをうけ、からだはあなだらけになりました。
いまも『てつどうはくぶつかん』にいる、『かば』のおはなしです。



「ふたりはバレリーナ」 バーバラ・マクリントック 作 福本友美子 訳/ほるぷ出版
ちいさなエマもおおきなジュリアも、バレエがだいすきです。あつたことはありませんが、よくにているふたり。エマは、あさおきてバレエのレッスンにでかけます。ジ
ュリアも、あさおきてバレエのレッスンへおかいます。エマはレッスンのあと、げきじ
ょうへバレエをみにいくのですが、ジュリアはなにをするのでしょうか?



「おかわりへの道」^{みち} 山本悦子 作 下平けいすけ 絵/PHP 研究所
二年二組のりょうた先生は、給食のとき、あまったごはんでおおすびをにぎってく
れます。かすみは一回でいいから、先生のおおすびを食べてみたいと思っていました。
でも、おおすびはおかわり用で、はやいものがち。食べるのがおそいかすみには、かん
たんなことではありません。かすみのおかわりへのちょうせんがはじまります。



「ほうけんはバスにのって」^い いたうみく 作 山田花菜 絵/金の星社
ぼくは二年生。毎年夏休みには、ねえちゃんとやまなしのばーちゃんちへ行くのだ
が、今年は、ねえちゃんがじゅくのため、ひとりで行くことになった。こうそくバスの
ていりゅうじよには、ばーちゃんがおかえにきてくれる。じゅんぴはかんぺき! でも、
だんだんふあんになってきた。夏休みのある一日のものがたり。



「カテリネッタとおにのフライパンーイタリアのおいしい話ー」
剣持弘子 訳・再話 剣持晶子 絵/こぐま社
おににとどけるドーナツを食べてしまった女の子や、パンでできた、ほんものそっ
くりの女の子のお人形。たましいとひきかえに毎日ごちそうが食べられるようになった
男…食べものにまつわる、イタリアの昔話が4つはっています。
この夏はゆかいでちょっぴりこわい昔話をたのしんでみませんか?



「ふたごのカウボーイ」 フローレンス・スロボドキン 文 小宮由 訳 ルイス・スロボドキン 絵/瑞雲舎
ふたごのネッドとドニーは、にわでカウボーイごっこをするのが大好きです。ある
日、ドニーが「きょう、ぼくは、カウボーイのステーキになる」といい、「じゃあ、ぼく
は、カウボーイのジムだ」とネッドがこたえました。こうしてふたりは、おたずねもの
や、どうぶつを見つげに、にわから、とありへでていきました。



「あずき」 荒井真紀 さく/福音館書店
おいしそうないやきのおなかのなかには、「あんこ」がはっています。あんこを
よくみると、つぶがあります。このつぶのしょうたいは、「あずき」というまめです。
「あずき」があんこになるまでのひみつを、さぐりましょう。



3・4年生

「トビウオのぼうやはびょうきです」 いぬいとみこ 作 津田橋冬 絵／金の星社
青いみなみのうみの、白いサンゴしょうのそばに、トビウオのおやこがくらししていました。ある日、ずっとおくのほうのそらがまっかにそまり、うみの水が大きくゆれて、ずずずずーんとおそろしいおとがひびきました。それから、まもなくゆきのように白いこながふりはじめ、トビウオのぼうやは、このこなをあびました。ある日「おかあちゃん。ほくね、とてもあたまがいたいよ。」ぼうやがいました。



「せかいでさいしょのポテトチップス」 アン・ルノー 文 フェリシタ・サラ 絵 千葉茂樹 訳／BL出版
クラムさんは料理がだいすきで、「クラムのレストラン」をはじめました。ある日、そのレストランに「ポテトをどっさりたべさせてほしい」というおきゃくさんがやってきました。できあがったポテト料理をさしだすと「ぶあつすぎる」と、お皿をおしのけられました。実在したレストランをヒントにえがく、ポテトチップスたんじょうのおはなしです。



「消えた時間割」 西村友里 作 大庭賢哉 絵／学研プラス
クラスで配られる時間割のプリントに、こぼれた墨汁が飛びちり黒いしみがついた。月曜日の「体育鉄ぼう」が墨汁で消えた菜々子は、けがをして体育に出られなくなった。そして、火曜日の「算数」が消えていた翔太は、教頭先生によびだされ、その時間にいなかったという。ほかに何人も、墨汁が消したとあり、時間割にあったできごとが本当になくなっていった。これってどうせん？ 4年1組の不思議なお話。



「ねこの小児科医ローベルト」 木地雅映子 作 五十嵐大介 絵／偕成社
よなかにユキのおとうとのユウくんが、ひどくはいたり、げりをしたりしはじめました。夜間救急専門小児科医の松田ローベルトという先生が、すぐにユキのおうちまで診察にきてくれることに。小さなバイクにのってあらわれたのは、なんとねこのおいしゃさんでした。やさしいねこのローベルト先生のふしぎなおはなしです。



「きくち駄菓子屋」 かさいまり 文 しのとうこ 絵／アリス館
佐藤浩介は十歳。両親が離婚したため、夏休みに入ってすぐに、おばあちゃんの住む町へ引っ越してきました。ある日、町探検にでかけた浩介は、古くさい看板の古くさい店「きくち駄菓子屋」を見つけます。おとなしくて、友だちができるのに時間がかかる浩介にとって、この店のじいちゃんが最初の友だちとなりました。



「パイパーさんのバス」 エリナー・クライマー 作 小宮由 訳 クルト・ヴィーゼ 絵／徳間書店
パイパーさんは、町をはするバスの運転手です。バスを運転したり、おきゃくさんとはなししたりするのは大ですが、家族がいないので、アパートに帰るとひとりきり。ところがとつぜん、パイパーさんの生活ががらりとかわることがおこりました。茶色い子犬が1匹き、パイパーさんのうちまでついてきたのです。パイパーさんといろいろな動物たちのふれあいが楽しいおはなしです。



「クルミの森のニホンリス」 ゆうきえつこ 文 福田幸広 写真／小学館
リスが大好物のクルミをどうやって食べるのか、知っていますか？この本に登場するニホンリスは、1日に10こもクルミを食べます。夏はブドウのように木になったクルミを上手にもいで運び、秋は地面でひろったクルミを冬にそなえて土にうめておきます。いきいきしたニホンリスの生態を、美しい写真で楽しめる絵本です。



「ことばハンター—国語辞典はこうつくる—」 飯間浩明 著／ポプラ社
知らないことばが出てきたら使う『国語辞典』、どのように作られているのでしょうか。辞書を作るためには、多くのことばを集めることが必要です。私は街を歩いたり新聞を読んだり、いつも知らないことばがないか注意しています。集めたことばをもとに、辞書にのせることばを選んだら、次は、意味の説明です。一番わくわくする作業です。さて『国語辞典』、どんなことばがのっているのでしょうか。



5・6年生

「お話の種をまいてープエルトリコ出身の司書プーラ・ベルプレー」

アニカ・アルダムイ・デニス 作 パオラ・エスコバル 絵 星野由美 訳/汐文社

1921年、プエルトリコからニューヨークにやってきたプーラ。彼女が働くことになった図書館には、プエルトリコの本がありませんでした。プーラは、おばあちゃんが教えてくれたお話を語ったり、人形劇にしたり、本にしたりして子どもたちに伝えます。わくわくさせるお話を、たくさんの人に届けた司書プーラの物語です。



「介助犬レスキューとジェシカー人生をかえた友情の物語ー」

ジェシカ・ケンスキー 文 パトリック・ダウネス 文 スコット・マグリーン 絵 よしいかずみ 訳/BL出版

ジェシカは、けがのため両足を切断し義足をつけて車いすで生活をしています。そんなジェシカのところへ介助犬レスキューがきました。レスキューとジェシカの訓練のはじまりです。いっしょに長い訓練の時間をすごすうちに、ジェシカは、わすれかけていたしあわせな気持ちになることができました。



「がんばれ給食委員長」

中松まるは 作 石山さやか 絵/あかね書房

なんとなく選んだ給食委員で、くじびきにより委員長になってしまったわたし。給食委員がどんな仕事をするのかもわからない。ある日、栄養士の先生がトイレで泣いていた。給食の食べるのこしが多いことにこまっているみたい。みんなが好きなメニューだけの給食にしたらいいと思うのに、それではダメな理由があるって先生は言うの。どうして？



「こんぴら狗」

今井恭子 作 いぬんこ 画/くもん出版

時は江戸時代。捨て犬だったムツキを助け、育ててくれた弥生が病にふせってしまった。ムツキは弥生の病が治るよう、霊験あらたかな金比羅さんへ「こんぴら狗」としてかわりにお参りに出されることになった。江戸から讃岐の金比羅さんまで、往復340里の長い旅が始まった。道中、ムツキは様々な人々と出会い、別れ、時に船に乗り、歩き続ける。本当にあった習わし「こんぴら狗」のお話です。



「ペーパープレーン」

スティーブ・ワーランド 作 井上里 訳/小峰書店

十二歳の男の子ディランは、父親とふたりぐらし。学校の授業で紙ひこうきを作って、飛ばすことの楽しさを知り、紙ひこうきジュニア選手権の全国大会をめざすようになります。父親とけんかをしたり、いじめっ子と対決したりしながら、ディランは、紙ひこうきを研究し続けます。

本の最後に「紙ひこうきの折りかた」が付いています。



「ミスターオレンジ」

トゥルース・マティ 作 野坂悦子 訳 平澤朋子 絵/朔北社

1943年のニューヨーク。八百屋の息子のライナスは、兄が戦争に行くことになり、配達をまかされるようになった。初日、オレンジを1箱注文した家に配達に行き、ひとりの画家と出会う。ライナスは、名前を知らないその人を「ミスターオレンジ」と呼び、親しくなっていく。ナチスが支配するヨーロッパから逃げてきた実在の画家と、少年の出会いの物語。



「売り声図鑑 江戸の長屋の朝昼晩ー江戸売り声でタイムトリップ!ー」 宮田章司 文 瀬知エリカ 絵 市川寛明 監修/絵本塾出版

物売りのいい声かとびかう、江戸の長屋にタイムトリップ。日本でたったひとりの江戸売り声芸人、宮田章司さんがご案内します。朝に聞こえてくるのは「アサリ売り」の売り声「アサリー シージーミー よーいっ」や「納豆売り」の「なーっとなっとなっとなっとなっとなー みそ豆ー」。昼のおかみさんたちの井戸ばた会議、夜のお祭りの屋台など江戸の町で暮らす人々のくらしがわかります。



「しあわせの牛乳ー牛もしあわせ!おれもしあわせ!ー」 佐藤慧 著 安田菜津紀 写真/ポプラ社

岩手県にある「なかほら牧場」では、今はめずらしい「放牧酪農」がおこなわれています。「放牧酪農」とは、牛舎ではなく外の放牧地で牛を飼う酪農のことです。自由自然の草を食べてのんびり過ごす牛の牛乳は、ふつうに売られているものよりもずっとおいしいと評判です。けれど、「なかほら牧場」をつくるのは簡単なことではありませんでした。牧場長の中洞さんの何十年にもわたる挑戦のお話です。

